

バルトークの民俗音楽研究における用語法の変化について

一作曲家の音楽構造解釈の歴史性をめぐり一考察

太田 峰夫

民俗音楽の旋律構造をめぐる初期の議論において、バルトークがしばしば、ブダペストの音楽アカデミーに在籍した頃に学んだドイツの楽式論に由来を持つ、藝術音楽の諸概念を使ったことはよく知られていることである。本稿は「ペリオード」のような概念に関するバルトークの理解に対して、ドイツの音楽学者ルードヴィッヒ・ブスラーが与えた影響を調べた上で、民謡研究者バルトークが、一九二一年頃に書かれた彼の有名な著書『ハンガリー民謡』以降、「ペリオード」や「終止」のような、機能と声法に基礎を置く西洋の藝術音楽と同様の形成原理があることを示唆するような言葉を使うのを避けるようになったことを明らかにするものである。恐らくホルンボステルのような比較音楽学者の影響で、ハンガリーの作曲家は「プリミティヴ」な音楽と西洋音楽の様式の違いに対して、より敏感になったのだと考えられる。

こうした用語法の変化は、創作における当時のバルトークの藝術上のストラテジーの再定式化（調性概念の捉え直しなど）とも、あるいは関係があったのかもしれない。この再定式化は、部分的には「プリミティヴ」な様式的特徴をもたらす新しい可能性に着目することによって、また部分的には「プリミティヴ」な音楽の「調性」について論ずることができるまでに「調性」の概念を拡大することによって、「プリミティヴ」な音楽の影響のもとでの彼のモダニスト的な創作の試みを、正当化するものであったのだが。少なくとも確実なのは、バルトークの研究活動が、比較音楽学の諸傾向や同時代の藝術の諸傾向など、歴史的な状況によってかなりの程度条件づけられたものであったということである。